

東日本大震災被災者の方々に捧げる

生熊源一

〔寄稿〕

小笠原 鳥類……………04

宇宙から来た沼の怪異（ドロステーヒュルスホフについて）

松本 秀文……………13

環境 革命篇

海埜 今日子……………21

《風なく、広場》

榎本 櫻湖……………24

散文と器楽、任意の電子音響のためのメデイテーション《燃えたつ樹々の随に揺れるわたしの影》／モン・サン＝ミシエルの（晴れやかな）頻尿

佐藤 雄一……………37

お返事も——C.M.2

〔公募詩〕

間 文子……………38

安定を常に置く

〔骨おりダンスっ〕

カニエ・ナハ……………39

古民家二階

金子 鉄夫……………43

マデイ・ウオーター／猫殺し／「くそつたれ」知りませんか？

疋田 龍乃介……………48

川の底からこんばんは／淡水の匂いのしないところへ

金山 大地……………51

失題、即ち闘争マシーン漂流記（抄・二）

兼樹 綾……………60

私の名前をいっばい言います／（瞼の奥）踊っている女の人

〔連載〕

萩野 亮……………63

連載■批評と詩のあわいで——壁について

〔編集後記〕……………64

宇宙から来た沼の怪異

(ドロステ＝ヒュルスホフについて)

小笠原 鳥類

おお、十九世紀の怪奇小説を書きたいと。思うんです。

古書店で発見した、講談社の世界文学全集103『世界詩集』（一九八一）で、ドロステ＝ヒュルスホフという名前が浮んで走っている、速い。ドロステ＝ヒュルスホフ、ドロステ＝ヒュルスホフ……ドイツの十九世紀前半の詩人の名前で、水槽でイルカがペンギンのように急速に走っている塊であったこと、思い出す。あのレコードは細かっただろう、お菓子の箱を開くと水槽が緑色に光っていたし、水面の上から見ているととても背中が透明な魚で、骨を見せる。「ペンギンは水中でフラミンゴ飛んでいるのです」ということを明るい声でテレビで流れながら言っていたのだし、テレビはいくつかの多い画面が街に並んでいて歩いていたのだと思う。聞きながら、歩いた。「荒涼たる」おお、このようなことも『世界詩集』のドロステ＝ヒュルスホフ、ドロステ＝ヒュルスホフの、解説に、小さな字で、書いてある……とても字が小さな本なんだな、なぜなら字が細くて、消えそうに見えるのだが、読むのが非常に困難であるとも思わないのだが辞典だ。七五〇ページ以上ある本なのだからね、国語辞典のように読むし、この本からの引用はゴシック体にするよ(他にもいろいろな言葉が聞こえてきて)」の中に入ってくるのだからね)「荒涼たる」(説明、解説、説明、解説。キノコについての図鑑にはキノコについての解説だよ)「荒野(ハイデ)」このハイデは荒野のルビだった。ドイツ語の辞典にあるHeideという語なんだろう、この砂のザラザラの上で這って歩いている手のようだった緑色だよイグアナはトカゲなんだ、「イグアナ」を国語辞典で歌うとトカゲとか、乾いている食べものだ果物である、などと歌と楽譜が書いてあるのだし、イグアナの声も描いてある絵だったかもしれない。辞典には細い線と細い版面で絵が描いてあるんだ、『世界詩集』でマンデリシュタムという語を見ていた。マンデリシュタムマンデリシュタムと繰り返して楽譜を歌っているし、鯉が、池で楽譜が歌っている。音楽を引用しながらいろいろ思ったことを書くレポート。

ドロステ＝ヒュルスホフ、ドロステ＝ヒュルスホフ、と、言いながら、歌った。

ああ「荒涼たる」「ハイデ」について小さな字で解説が書いてある文学の辞典のようである国語辞典のようであるという話をしていたネズミのように小さな声で声で。「ハイデを歌う詩はとくに緊張した」鯉のようなヴァイオリン、ウナギのような「力強いものである」長いし、長い骨が透明で、水槽の中に無脊椎動物の謎の動物が泳いでいるのをクネクネ見ていた。正しく見ることがクネクネ動きながら、見ることである頭を動かしているラッコであった。ラッコを撮影した「異様な幻覚」（おお、『世界詩集』の、解説である）ラッコが水面でクネクネ泳いでいるのでネッシーであると思っていたラジオであるのだな。ラジオには小さな黒い箱であるのだが穴がたくさんあって、それはUFOのザラザラなゴムの表面であるのだとずっと思い続け、UFOについてのマンガをラジオを読むように細かく線を使って読んでいた。ドロステ・ヒュルスホフの、ドロステ・ヒュルスホフ（「ドイツ最大の女流詩人」であるという）十九世紀前半の。おお（1797～1848）なので十九世紀前半である、言った。ブラームスがいただろうシューマンが。ベートーヴェンが弦楽四重奏の曲をザラザラ組み立てるし、今日一日でラジオで全ての弦楽四重奏曲を演奏しましょう、同時にいくつかの曲をクネクネ組み立てながら、多い楽譜のページを辞典を見るように椅子を見て演奏していたし、この——椅子——木なんだな、「沼地をわたる少年」（これがドロステ・ヒュルスホフの一つの詩の題名だよ）沼地には

灌木

多いでしょう、この木を使ってクラリネットを作ったし、クラリネットを歌う歌が「バラード」であったのかもしれないと思つた古いヨーロッパの詩であるし古い木の版画を石を見るように見ていた墨であったんだが、墨をテレビで見ている。墨を、テレビで、見る。テレビがイカの多い緑色の海になるよ、ペンギンがラッコに似ているラジオであると思ひ続けていた夢の竜なんだ、この——竜——版画だな、恐竜を大昔の人々が粘土の映画で少し動かして少し動かして銀色の赤や青や緑がギラギラであったよ、恐竜が多く動いていてお菓子を作っている映画を思っていたんだ、この恐竜が砂の上に足跡を残していたし、「沼地をわたる少年」はドロステ・ヒュルスホフの、ドロステ・ヒュルスホフの、詩の、題名で、絵の、題名の、ような、ものである、と、思っていたんだ（「生

野幸吉訳」おそろしいという詩である「沼地をゆく」ことが、とても恐ろしい映画であるな、なぜなら巨大なヒルが人を食べる映画であるということをやウムクーヘン思っていたし、バウムクーヘンバウムクーヘンと、ロシアの詩人の名前繰り返し繰り返す、と、思っていた。その頃に同じ頃にベートーヴェンとか、ベートルズがいて、料理を作っていた。この料理は、濃いのです。「雷は幻怪さながら」のようであったというモヤ。テレビで昔午後でワイドショーを見ていて、とても明るい緑色の風景にベートーヴェンもあつたことを思い出す、あれはCMだったんだな、とても明るくて、橋があるから川も明るいのだよという宣伝・広告であつた学名であつたのだ(ラテン語)であつたのだ、テレビの中にはいろいろな細かい光の菌が住んでいるネ

「ちやちやき歌う声のある」「沼地をゆく」という、暗い詩でドロステルヒュルスホフが書いていたこと。ささやき歌う声はシャーロック・ホームズの犬の小説や映画やドラマで描かれた……ことでは……なかったの、と言っている歌っている。歌っているレコード。昔の古い映画であるなあ今はディスクで光の線で見ることが、できる可能、なのかな。ガチョウを見ることが動物園などでできるだろうかといつても思っている巨大な犬だよ。その、犬、アニメ、マンガだったんだ、アメリカのマンガであつたのかもしれない、アメリカの新聞にいつても毎朝毎日印刷されている線だったし、少し言葉が多かつたかもしれない。「暗い嵐の動物だった……それは犬だったりサイや象であつたりしたんだ」ということを楽譜が印刷されながら細かい線で歌っていた。(スヌーピーのような貝だよ)歌がある曲であるのであれば楽譜に小さな小さな字で、ひらがなで、「このように合唱するんですよ」ということが歌われている。小さな字を拾って印刷したんだな、時には草原に落下している字であることもあるだろう、それを……犬や……ラクダが……見ながら歩いていていた歩いていた、いつでもドロステルヒュルスホフは「ふるえる子ども」について書いていたのかもしれないよ、この「ふるえる子ども」が、ドロステルヒュルスホフの沼地の詩からの少しの引用であるのです。

ボブ・ディランを聞きながら書いているんだ。ところで、この講談社の『世界詩集』にはディランの詩はないね。ディラン・トマスの詩は、ある。イギリ

スとアメリカと、フランスとドイツと、ロシア・ソビエトの詩の日本語の翻訳が、載っている本で、もつといろいろな場所の人々の詩があった方が広がった拡大である顕微鏡や望遠鏡ではないか星、ではないかと思つたが、しかし小さな字が多い本でとても詩が多いので、何かがあつた時に凶鑑のように調べるキノコではないか、私はキノコであるのかもしれないし、オットセイはアザラシであるのかないのか、歌はレコードではないか、歌がグルグル回転しているのですよ、「亡霊じみた墓掘りの男だよ。」ということをし、ドロステ＝ヒュルスホフが、ドロステ＝ヒュルスホフが、書く。沼地の、詩の、中で。沼地がワニの墓になるだろう象の墓に、なるかもしれない、と、想像して、絵を、描く。書店である画家の「幻想」であるという絵を見ていたら線が細くて、絵の具で水が塗られていて、買わなかつた画集であつたかもしれないし、建物が多い画集も夜に買わなかつた月の色である黄色だつた金色であるのだが、しかし、しかし、お、**「牛」**も、ドロステ＝ヒュルスホフの、ドロステ＝ヒュルスホフの、ドロドロ流れるワニも流れるような沼の金色の詩に流れていた。この金色が暗くて銅のようで、それは水面のナマズの顔の模様のようなだつた、熱帯魚の大きな大きな凶鑑であるならば数百種類のナマズを楽しむことができます。ナマズ、版画、模様。

「**岸からは切株たちがじっと見ている、**」オオオオオオとゆうといろいろなものに顔があつて、小石や小鳥がウグイスのように歌っている小さなものいろいろな色があつた。お菓子のように乾いているんだな、これは建物の門が多い幻想で、そこには月のような青い人が立っている木なんだよ、木にいろいろな模様を彫刻していたペンギンだつたんだアザラシなんだアザラシおはよう、と言っている録音。録音の機械からいつでも同じ音楽同じあいさつであつたよ、ゲームの部屋でいろいろなあいさつを聞くこと、ありました。アザラシが廊下で歩いているし、廊下にはいろいろな絵が多く場所にも広く広く（幅広く）描かれていた。それは細い線で、非常に長い国を描いていたと思う。ここには……川が……あつて、それから、ここには……電気が……あつた（廊下が明るい）廊下が明るい明るいよ。それはレコードの表面に写真が描かれているとても明るい人の顔であつた、着物を、着ているだろう。建物の斜めの線である壁

や天井に多くの人々の歌っている絵が描かれているし、眠っている料理の絵も描かれて、「**松の木はぶきみにうなずく、**」ああ、そうですねえ、と、十九世紀の怪奇な小説の、門の、ように、言っていた。私は石が乾いていると思っていた、それは赤い石であったのだし、四角い石で、階段で見ることがあった。

その階段の踊り場（今、踊り場、という語を、初めて使った人であると思つて、想像する）に、色が多い石が多くて、どの石も建物なので四角かつた明るい石なのであつたし明るい色で、あるいは、コンクリートの……上に……いろいろな四角い色を塗ったり貼ったりしている新聞のようであつたのかもしれないと。その上で楽器を持つて歩いていたんだな、昔の人々は笛を持つているヴァイオリンを持つていた。そこで象や猫も踊っているようだったのだし、グリム……童話……グリム……童話……いろいろな出版社から日本語の翻訳が出現しているのを野菜を見るようにサラダを見ることができるとは可能なんだが、岩波文庫を、見ていた。それから、眠りながら、グリム童話の本に細かい線の暗い濃い版画が現れているのを、見ている。いにしへの版画の本を歌うのは楽しいな、象や、いろいろな十九世紀か、それよりも前の版画の描かれている動物（エイ）を見るのが、楽しかった。鳥の版画に色を塗つて、ハンカチであるようにした。細かい絵を切り取つて貼ることでいろいろな図鑑をとでも色が多い踊り場にする、こと、できる。可能だ。レコードは色があるレコードで絵が描かれて、絵や色がグルグル回転するとヒヨドリとかヒバリとかいう動物の名前思い出しているんだ「**巨大な葦**」巨大な

石の

怪物だよ！のようであつた。

それから、一行「**葦原はなんとせせらぎ、ひしひしと鳴るのだらう！**」巨大な石の怪物には巨大な石の足が、ありました。怪物映画を見ている人であるならば怪物の全体を見ることが簡単であるなあ容易なんだ、簡単に数時間で演奏できるような可能になる料理の楽器であるんだよ、しかし本当に怪物を見る人は怪獣の足だけを見ていたり、夜なのでザワザワのガサガサだけを見ていることもあるだろう植物は青くて黒いなあ。そこで映画の人々はミュージカルなので歌つたりするし、歌は——あらかじめ——作曲されたものであつて、予め、

予め、ということをして、言っていた。ここに楽器がなくても、映画であるなら映画には夢があつて夢は楽しいな夢は恐ろしいなあ、そこでピアノを演奏する人がいるならば夢のオーケストラがあつて海が、ありました。海は、料理なんです。そこでコンニャクを想像しているし、幻想の絵を描いて幻想の音を録音している、ミュージカルの舞台がどこまでも奥に、こちら側に、と思つて広がつてくる映画のポスターであつた。古い映画を光のディスクで多く見ていると海が広がっているな、そこではタコとか、イカに襲われながら演奏する幻想の人々がいて、イカはいろいろな温かい色なので秋の山がイカであるのではないか口を開いて人間を食べる肉であるよということをや映画の最後にささやきで言っていました。「**あれは魔法にかけられた、**」魔法とイカの組み合わせスパゲッティ

「**ゆいっ、ゆいっ!**」そうだろうか。それから、ポスターに多くの字が書いてあつて、あるいは、UFOが銀色で粘土で作られて、表面が、滑らかであるのだな、というウナギを思つていた水槽がなめらかである。なぜなら中に泳いでいるいろいろなメダカの凶鑑を見るための大きさ。木の建物が石の建物であるケーキなんだねえ、ケーキがイルカである金色の回転する時計が公園であるならばグルグルの機械が金属であつたさ、宇宙から飛んでくるのだよ、飛んでくるものの窓は水圧と戦うための潜水の圧力の丸さなのだ。深海魚も観察できるよ、水族館で深海のイカや深海のナマコ。を、観察する飼育する熱帯魚であるということについて、考える考える、「**走るんだ!**」「**物の怪(け)**」このケが怪の横にあるルビのとても小さな字で「**ヴァイオリン弾きのクナウフだ!**」知らない人だなー

ヴァイオリンを水中で演奏する人の写真をポスターのような凶鑑のような辞典で、見たこと、ありました。それは世界のいろいろな記録(新しい)を記録する小さな字の辞典であつたと思うんです、青かつたので数字はカラーでした。水面からの数字が青くてプラスチックのようになってるし、タコと戦う映画である海をゼリーで作つていたんですということや歌う。言つたり歌つたり階段の踊り場で色の鉛筆を多く絵の具を食べたりしていた。それを食べる事が宇宙で演奏する生活なんです、宇宙で栄養のあるメダカを食べたり鯉を食べたりしていたんだな、生簀(いけす)を、水面から持つて行って、宇宙で

会話をしながら楽しい会話の教科書であったりした、会話の教科書に楽しい明るいカラーが多い多いと言っていた。この会話で、「それはサンドイッチですか」「なぜなら映画であるからです」「明日はどこに行きますかワニが」のようなことを並べていると、ワニが人を食べたり、ワニがダチョウを食べる映画であるんだなあ野趣だ、と、言っている。この野原で野趣が走っていた。ここで乾いた魚を焼いて食べているイカであると、そのイカが怪物だ！沼についての詩を選んで読んでいたのだなあドロステーヒュルスホフの、ドロステーヒュルスホフの、と言っている。絵本を見ていたのではないだろうか辞典のような、鳥のページもあって、いろいろなアフリカの鳥やアフリカの沼を見ていた。アフリカの沼の肺魚を食べるハイデの虫であったのだし、その肺魚を食べる灰色の鳥であるよ、動物園でいつまでも動かない記録の映像を見ていたんだな（テレビで）写真なのか人形なのか、時々口を開いて呼吸するナマズを食べる人のようであったのだよ、プールのナマズ、このプールにはサメが多くてねえ人を食べたいんだよと悪い人が言いながらスパイの映画で笑っていることもあっただろう、その映画ではオーケストラと歌の踊る踊る闇の音楽の映像が最初にいくつか流れたので、そこでは光る布の服の輪郭、見ていた見ていた。おお、輪郭がドロドロ口になってヴァイオリンが溶けて流れているよ、チェロだったのに、そこからお菓子になっているケーキ、そこから宇宙の乗り物を食べる。「おお、怖（こわ）、呼ぶのは、呪われたマルグリートの声、**「ほおっ、ほおっ、哀れなわがたましいを助けて！」**」ここで「助けますよー」と楽しいゆつくりの声で言いたいと思ったりしました。それを言う人がいるのを建物で聞いていたんです。そこは

控え室

でありました。なぜなら私は次の瞬間に朗読をするために舞台に出てくるのを待っているレコードであるグルグル回転であったかもしれない鹿。「こわ」というのは「怖」の小さい字のルビであるので、こわ、こわ、と（カエルが）（ゴイサギが）発音している小さな沼であるナマズの必要……発音の記号であったんだな、辞典であるならアクセントもいろいろ細かい字で書いておくととても楽しい楽譜であるのだ辞典は楽譜だ、箱に、入っているよ。ベートーヴェンの

全ての交響曲の楽譜を集めて箱に入れておいたような、ものだ。それを連想する空想する。レコードの箱には古いポスターのようなヨーロッパの風景が沼も川も船も印刷されている城のいにしえのカラー印刷であったのだ。それはカラーのテレビで、古い番組を見て、おお、これだよ、このピアノがジャズだ、と言っていた。レコードの箱をグルグル回転させているとエイが見えてくるだろう、一九七〇年代の一九七〇年代の、印刷が、なつかしい。文字がキラキラしていて太陽の光が温かい、今の印刷は冷たくて熱いよ氷のようになってしまった映画、と言っている言っている。鳥の図鑑も果物の図鑑も言っていた。あッほおいほおいとよ言っているのがビックリ！魂はドジョウのような丸みのある魚なんだな、ケーキがクッキーがビスケットが沼で遊んで浮んでくる楽しいピクニックの軽さや腐った魚であること、思い出していた。腐った魚を私は食べないがサンドイッチを見つけた。この公園ではかなり前にいろいろな人が騒いで、その後には片付けなかったよ、ということをおバードで歌っていた。譚！

ロックの人たちが歌って演奏した後のウッドストックのグチャグチャだったんだろなあジミヘンドリックスが朝に最後に演奏していたのだっただろう、ということをおバードで聞いたことをいつまでも思い出しました。古い映画というはずと前から映画の歴史は始まっているキートンやチャップリンであったのではないかと思うが、しかし土が赤くて写っている映画であると沼もあつて、古さがワニの化石であると思つた、化石は両生類（四メートル）になるだろう、ザラザラの絵で描かれていて沼で走っている動物である馬を見ていた。両生類の手足の細い指を見ているなあ見ているよ「少年は傷ついた鹿みたいな跳ねあがる、」もし鹿が両生類であるのであるなら夢であつたね。カエルが歌であるならギターもカエルである骨だっただろう。楽器には骨があるクラリネットなんだ、ハーモニカも骨であるのが聞こえ「後日、少年の小さな骨」その後には大人の骨に成長していく健康で健全なカルシウム食事もあるだろう食べられるキノコだよ、これ、食べられるキノコだよ食べられる鹿なんだ、鹿の肉のステーキであるなあカモもある。カモをテーブルの上で見ているんだ「ここで料理しますよ肉」ということを、布の上でワインを見ながら後ろで弦楽四重奏がシベリウスのアンダンテを演奏しているのを横目で見ていた。昆虫は動

物であるなあ昆虫とチーズであったよ。カモのステーキで、「魚よりもカモが良
いですよ」（そのレストランではそうだった、ということ）私は夜に公園でグル
グル回転したし、昼に道路のような公園でグルグル話していたこともあった、
赤いハトを見たんです（あのハトを食べたら……）あのハトを。その赤い公園
でジミ・ヘンドリックスが演奏していたらギターの音が中心で大きかっただろ
うと思うが、私はユリカモメを見ていた。とても楽しい食事のコーヒー笑顔

窓「**ランブがほのぼのとふるえて光る。**」あの、ドロステーヒュルスホフの、
ジミヘンドリックスじゃなくて、ドロステーヒュルスホフの、夢の終わりの
ような詩の終わりだった。夢が終わる前に詩が終わってしまったらどうしよう
レコード、レコード回転であるピアノ、と、言っている。少年は実は生きていて、
生きているなあ「**息**」呼吸であるよ、沼から出てきたんだ沼の上や沼の中を走っ
ていたが、沼から出てきてエビから出てきたんだな。エビは迷路だった透明な、
外を見ることもできるがとても赤や緑色になっている。光るエビ、沼の色であ
るエビの色、透明な映画の絵の具キノコであったという「**おお、ほんとうに、
葦原のなかは怖かった、**」動物が肉を食べる怖いネ、ライオンが怖いライオン、
虎

虎じゃなくて（その後、めでたしめでたしの章）実は飼育されている水槽の
小さなエビのようだったので安心だね、人間が食べられることはない目覚めだ
という話だった。しかし謎の足跡が沼だった恐竜いきのこり版画。

……

えー、後日、手塚富雄・神品芳夫『増補 ドイツ文学案内』（岩波文庫、
一九九三改版）見ると、アネット・フォン・ドロステーヒュルスホフいました。「ド
イツ最高の女流詩人とも言われる」「彼女の詩のうちとくに自然詩では、最も微
細なものに目を注ぎ、耳をすましている張りつめた驚きが、われわれを驚かす。」
「言いがたい神秘と無気味さ」そして、詩が少し引用されて、夜「蛙は沢にかが
み／はりねずみは草にひそんでいる、」ザワザワの細い草（葦）が多いと、その
草の一部分がハリネズミである版画 線

環境
革命篇

松本
秀文

(不在 UFO)

明るい円盤

(鮮やかな錯乱が幽霊の唇に……)

花のように冷えた柱に寄りかかって

濡れた恋文を抱えた (YOU)

「ほとんど死んでいる気がしていた」

火星で農業を行うマンモスのヒラタトシコ

銀河のホテルで人妻と向かい合う瞬間に詠む短歌

(電波の船で三人組が……)

金属ノイズとタツノオトシゴ

矛盾の花畑を駆け回るライオンのヒラタトシコ

不在大統領の演説が大聖堂「ニッポニア」で行われる

「わたしはいない」

ユーモラスな蛙たちがくつろぐ月面基地

誰にでも fire

夢泥棒の夢を盗むトナカイのヒラタトシコ

黒猫が円盤の内部で落語の練習をしている

POPな光が銀河を泳ぐ魚に降り注ぐ

あたたかい古代の血流のリズムに耳をすまして

無重力の中で笑う (YOU)

(ひっそりと) 闇

(劣悪な環境がいやらしく髪を靡かせるエリア)

鯨たちが trigger の橋付近で集会を行っている
罅割れた抒情

「君を歓迎する」

室温の異常が齎す不快感が幸福へ変わる

星の瞼に剃刀を当てる瞬間

ざりがこの YOSHIKI が全身全霊でドラムを叩く

野獣の eroticism

(ぬめぬめと) 性器

神様 (仮) をレイプしたなまずの野望

汚れた水槽内の複数のヒラタトシコ

不機嫌な鮫鰐が海底都市を漂流する

時間の先端に侵入するために人妻ににゆるつと舌を入れる

銀河における「絶対的な孤立」の作法

(小津安二郎の視線が銀色の街の底に……)

誰も乗りたがらない箱舟「おでゅっせいあ」

つめたい空白を人妻のお尻の上に置く

「まさお君は正真正銘の猿です」

フィルムの傷を修復する男の狂気が言葉から言葉を吐き出させる

(むっちりと) 枕

顔面に火星を注入して笑う

(マンモス内部における喫煙所付近)

深い霧が海老を吐き出す化石の森

「ロマンは王女の瞳の奥に眠っている」

渋滞の街から抜け出すために trigger の橋を渡る (YOU)

(なめらか過ぎる人妻の肌を撫でて……)

野良猫たちは煙を吐き出して笑っている

(ゆったりと) 異議なし

寝不足の犬たちによって製造される火星儀

「平日はジャムを舐めてばかりです」

スペースシャトル「じみへん」は蛙第十一層を通過する

お茶目 technology

大胆不敵な草原と山羊との情欲まみれの性交

「ありがとうリアリズム」

詩祖を産毛に飼っている少女の唄を BGM にする工場労働者たち

(長いロールパンの憂鬱さえも……)

巨大なカメムシが人間を食べる映像

地下食堂「困窮爺」では革命へ向けた緻密な計画が練られている

「私たちは自由を知らないまま……」

マンモスの鼻の穴から深い思考を孕んだ煙がゆっくりと広がる

スペースシャトル「じみへん」は蛙第十七層付近で消息を絶つ

ブスにピアス

(ヘヴン付近)

物語の不在

飴色の暗闇を舞う赤い糸

暗い絵の具で絵を描いている (YOU)

(桃色の髪が宇宙の中心で……)

ミッフィーがチョコレートを齧る

優雅な solitude

「えりかちゃんはゴッホに憧れているようです」

自画像を描き続ける配管工の柴犬

下半身がない快樂主義者たちの夢

処刑の崖

少女たちが不在大統領にレイプされながら死んでゆく

ノスタルジイの風に吹かれている野良猫

既定のプログラムと戦い続ける鴉たちの勇氣

宇宙は紅潮しながら広がってゆく

素敵な emotion

(人妻の悲しい皮膚の声が反響して……)

ガンマンの心の暗闇に一本の蠟燭を灯す (YOU)

天国までヒッチハイクするダンテの顔面を

パロディイの蟻が這う

「とろとろのシチューのお出ました」

(「無縁」の意味を知りたがる人々が集うショッピングモール付近)

憂鬱な air

小便小僧がハイビスカスを咲かせている

空白についての試論

月面商業施設へ向かう探検家たち

「思い切りお買い物しようぜ」

「不滅」という装置の発動

吸血鬼Tシャツを着た天才芸術家がエスカレータを昇る

火星人が経営している中華料理店「さあマーズ」

様々な moonlight

灰色の犬が臍から神様(仮)を取り出して消費を讃える

現代音楽しか流れない喫茶店「モデルニテ」

「不人気広場」で高齢アイドル「これからだ」が車椅子で歌う

(黒い羊の丘で人妻の乳房が転がって……)

チョコバナナクレープを食べる男子中学生たちの冒険譚

「リアルにドキドキしたぜ」

短詩型貴族のマリーが子犬を抱いてベンチでくつろいでいる

悪童たちの security

空調を孤独が燃焼する温度に設定する

永久にショッピングを続ける (YOU)

「自由に逃げろ！」

(リアルな砂の惑星)

雨の不在

ありきたりの銃撃戦

生き物が必死で涙を我慢する赤い小屋

しつこく生き続けるための方法

叛逆の鳥の群れ

言葉の骨を噛み砕く恐竜たちの風景

晴れやかな chaos

無思想の石を蹴る羽虫たちの風景

(本能的行為を侮蔑する知的優位性の無根拠が嵐になって……)

死体の山の頂上で自己紹介し合う男女

奇妙な岩から奇妙な舌がにゅるっと出て爬虫類を呑み込む映像

「愛し合うことの意味を再び知る」

妄想的な multiverse

駱駝の又吉が冷えたビールを飲み干す

目玉焼きを食べる時代閉塞家族の斬新な映像

(裏切りの光さらさらと……)

ブラックホールの奥で笑う (YOU)

時間の外側にある廻廊を不在大統領の影がさまよう

「愛情先生、たかし君が給食を残しています」

何度でも処女だった

(あらゆる恐怖が集中する大聖堂「ニッポニア」付近)

詩の不在

人妻との情事が蛙第十八層付近で続いている

薄暗い郷愁が滲んだミルクティーを飲みながら

「只今より革命を開始する」

三人組は錆びついた脳を杖にして計算問題を解いていた

(遙かな時代の階段を……)

神様(仮)も凍えるような殺戮映像

細い通路をゆっくりと進んでゆく(YOU)

全てを破壊するprogram

諺を武器に闘争し続ける新進気鋭の革命家チャラ男

「石橋を破壊して泳いで渡れ」

paradoxの鶏小屋の掃除を続ける聖職者ヴィヴィ

人魚たちが銀色の波のように宇宙を泳ぐ映像

老いゆく者たちが天国を熱望する歌

絶体絶命revolution

郊外のバー「十九世紀」にて性愛の悲しみを語る人妻

(全てを変革するためのキャンディーを舐めながら……)

鳩の時計がマグマの裏側で鳴っている

民衆が一斉に踊り出す夜

大聖堂から空が支えきれない程の花火が上がる

《風なく、広場》

海埜
今日子

「物語の中では、死者は当然のように蘇り、空をはばたくことさえできるのだ。」
(原作・金城一紀／作画・遠藤佳世『映画篇』ビッグコミック・スペリオール)

むかしのかたりくちがまねいていた。旅につんぎぎ、おぼえていようとひみつをいだけ。すなまじり、ようしやない、きょうもどこかしらにいきなれば、たたくほどにかぜ、そそぐので、いきをひそめたあいだからだった。かくうのじんぶつがぼやけている、しぐさたちがおいこしていった。わかれながら、あとをつけよう。きおくたちをかきあつめ、はなのようにたむけること。

わたしのちいさなひろばたち。かたみもそここでむせるだろう。うずたかく、なるまでまつて。するどいそうぞうが、あぎやかになり、まだつむつていなかったのだろうか。ひとつのひろばでかばんがこわれた。みやげのようなひとこまだ。つながりについて、はなのかげでむしりたい。おぼえるために、どこかがかわく。

そのいつかくで、たふんでかけはじめたのだ。旅のそこで、ここで、ひみつにまみれる。ものがたりをまつて、じんぶつはまたいきはじめていた。どうしたつてみうしなつてはならないのだ。なぎをまつておちたつぼみ。べつのひろばで、ふほうをまたきく。あいづちのようにだれかがなびいた。ねこぜにたもつて、もちはこぶこと。さじんのような、たねのような、ひとりがこぼれる。

むかしのかたりくちがぶれてゆく。いつかくで、そこかしこで、のみこむいつわ、きいたはなしがざわざわとし、かぜがあえぐように、また、だまつた。なげくことがゆるぐのだ。じんぶつに、なまえをつけるのか、おもいだしたのか、しぐさをたずね、どうちようのため、ずれてゆく。そうぞうだけがなつかしい。どこかしらで、かばんをなおした。ひみつをまもうと、旅をいそぐ。

ひろばたち、おもいのたけを、みみうちでもするように、こんもりと、いめーじたちでかさねている。いちじんの、すなのつぶやき、ここだ、むこうだ、おもいかた。たましいのように、かるさのまま、ますますすくいこむ。ふほうはどこでおいついたのだろう。はなのかおりが、わかれをかわした。ざらざらと、かぜ、はこぶ。ひとにぎり、かばんにつめた、しなじなです。

たぶん、あとをつけられることもあつたのだ。ひみつたち、めくばせをしあい、すなぼこりにまぎれてゆく。かくうがじんぶつになまえをつけたがつている。かぜをいたんで、わすれたくない。もうひらくことがあつたのだろうか。さらさらといはい、かたをくるむなごりがあつた。すぎさつて、そここで、みやげばなしがふじようした。どこかがしめり、おわつたはなびらがてにのこる。

むかしのかたりくちですなをまつと、ようしやのないいきぎまだつた。かばんをかぜにはたくように、べつのせいを、おいつかなければならなかつた。つながりについて、じんぶつをなんとしてもそうぞうする、わたしのちいさなひろばたち。旅のむこうで、そこで、まねくひび。ねこぜにかんじて、はなをむすぶ。くいこむひみつへ、どこかをかえろう。ますますかわきがるやかになる。

散文と器楽、任意の電子音響のためのメディテーション

《燃えたつ樹々の随に揺れるわたしの影》

榎本 櫻湖

滴る水の音が聴こえていて、その滴の一つひとつにあらゆる事象が包み込まれている、あらゆる事象の虚像が、概ね見えるのは樹々か煉瓦塀、それから忘れ去られた消しゴムの滓と屎尿便の陰翳、

（演奏

者は水の音からある程度の距離を保つことができるようになってから始めて四肢を動かすことを許される）

あなたの千切れた魂がたうたうようなか細い音がどこからか聴こえてきて、蚊の鳴くような声だとそれはいったものだけれど、実際はあなたのその大きな手から指先が数本もげて、そこから滴り落ちる血液が、結晶化した思念の端を震わせ続けているのだった、

（最初は高い音域で、爪を一つずつ剥がされる時に立つ音や海底に沈んだ船に乗っていた若者の死体を襲う耳鳴りの音を連想しながら、或は引っ搔いて）

あなたが残し

た幾つかの版面に描かれた小さな怨念が渦巻いて、それが際限のない時間を経て硬く結実していく、

（引っ搔き傷に囚われてはいけない、

懸命に、耳鳴りに耐え、そしてそれらが飽和したとき、束の間訪れた沈黙に安堵する）

滑らかな体液は、その上に岩と岩の隙間から湧く清水のように零れ、それもまた鍾乳石のように固まって、いつしかそれはわたしに刺されてしまうのだろう、我が身を穿つ思念の残滓がわたしの体内で芽吹き、そうしてわたしはあなたになる、

(あな

た方は常に衝動的に音を立てるべきであって、それぞれの音の大きさは、空腹感や尿意等に比例していなければならない、つまりあなた方は、自身が抱く多くの煩惱によって四肢を拘束されているようなものなのだ)

夢の中でわたしは何度も叫んでいた、おまえを殺せ、今すぐに殺せ、と、けれどあなたはただスクリーンに映しだされる影のようにゆらめいて、はたたく生成りの布のように舞うあなたのもとには、私の声などまるで届いていやしないのだろう、やがてあなたは大きな声をあげて笑い、わたしに向かって云ったのだった、
なにも見えない、なにも見えないのだ、と、

(もぞもぞと膀胱の膨ら

みに堪えながらあなたはそれを音に反映させるべきで、往々にして音の群がりはだんだんと大きくなっていき、それでも解決されないあなた方の苦悩は耳を劈き鼓膜が破れてしまうかもしれないと甚だ恐ろしく感じるくらい大きな音に変換され、ただ一度、たったの一度だけ鳴らすことを許されるその合図は、実はあなた方のその目が、ただの硝子球に過ぎないのだと気づいたときに始めて鳴らされるものとまったく同じなのだ)

あなたは蠟燭に点された小さな火

の中にいて、わたしたちの住処を燃やしながら大きく育ち、涙を流しながらもなお燃え続けていた、

(あなた方は目と耳の機能を失い、

複雑な器官は観察者を充足させられるものではあるのだろうか、とどのつまり修飾物は意義を取り払われて始めて真の機能を手に入れられるわけで、それまでは唇を動かして懸命に発語を試みなければならぬ)

わたしはそれを終始凝視し続けなければならない恐怖に戦きながらも、その愚かさとするせなさがわたしの心を癒してくれたりもして、それでもあなたは燃え続け、そして、灰になる、

(弛緩

した腕を使って自由に、明朗に、おおらかに、たおやかに、それらの形容動詞の内の一つを選んである一音を奏でよ)

あるときあなた

は海に沈んで、

(無数の泡が海面を目指して上っていく様を、指板の上で頻りに指を縫わせつつ音を上昇させていくことで描写するという安易さに辟易しながら)

波と雪が混じりあつた流れの狭間で漂う水母の触手に囚われて、

(しどけなく右腕を動かして鳴らす音は、ともすると頼りないように聴こえがちなかもしれないが)

全身に

その毒が回る頃、

（その痺れにうち震えながらあげる喘ぎや呻きなどの声を模倣して）

貪婪な鮫に下肢を喰い千切られてしまう、

（徐々に

血液が失われていく恐怖に囚われた音を発する木製の楽器の）

断面か

ら延びる血管は官能的に揺れ、そこからは聖水が絶えず流れ出ている、

（しゅるしゅると上昇したり下降したりする音で代替して）

しか

し誰もそのことには気づかない、ただわたしを除いて、

（このとき散

漫な音を鳴らす）

流れが、足元から始まり、その先を目で追っている、
くなくなりすぐに追手がやってくるために、それらはみなわたしとあなたを象徴する点描画のようなものであると、水に紛れる体液の残像を眺めながらふと思うのだ、

（やがて顫動する声の端々に止まった蠅

が、あなた方の右耳へと入り込み、鼓膜に至る隧道の壁面にびつしりとこびり付いた垢を、舐めるように、戦慄、する、声、と、蠅、の）

(刹那、耳鳴りに閉じ込められたゲツセマネで胎動し始める鯨、それらは徐々に音量を、増していく)

靡く髪がまるで画鋲で留められたように静止するその瞬間を捉えた壁面に反響する聲明、僧侶たちは徐に、各々の袖口に手を差し入れ、取り出したのはわたしとあなたとを準えた繊維質の塊、それから、経典、誰も溺れずに、

(音は

安定したまま)

わたしを覆う濁った湖水、凍結した湖水の中でわたしはわたしの容れ物をそこに忘れ置いて岸辺を、歩く、その都度、啼き交わす鳥たちはいちいち墜落する、

(弾く、叩く、痙攣する掌で

もって)

角の折れた山羊が何頭も押し寄せる畔で、それでもわたしは歩みを止めずに、湖底に脚を置き忘れたまま、

(なおも弾かれ、叩

かれ続ける)

わたしを襲う獷猛な草食獣たちは決してわたしを食すことはできない、

(その中から微かに頭われてくる細い線、撓みなが

ら)

それでもわたしは身を捧げ、草食獣たちはその虚像を前脚や口吻で突つき、その傍らで鳥たちは墜ち続け、凍った湖面に現れるあなたの半身、風が止むとき、どこからか投げだされた熱情の欠片が、わたしやあなたの虚像をも飛び越えて、針葉樹の茂る山へと、落下して、泣き喚く樹々の声は喧しく、草食獣たちは次々に倒れ、そして溶解し、または蒸発して、一本の毛も残さずに、ただ砂利が敷かれた上で瀕死の鳥たちが喘鳴するのを見詰めるだけ、

(露悪的な音の

塊を幾つも放つあなた方はときどき掠めとられなければならない、等間隔に平行に引かれた線の束に、しかしながら諦めてもならない、そこから脱出するために)

解脱、それは叶えられない終焉の描写、燃やされた備忘録に書かれてあった秘密の線画、幽閉されたあなたを解放する方法など一つもない、どちらにせよわたしは動くことさえ許されてはいないのだから、なにも見えない、

(沈黙)

白)

(その後独

(線上を細かく刻む指を、最早何人ももぐことはできない、圧倒的な誇張、独善的な明滅)

樹々は爆ぜ、火の粉は舞い上がって湖面に降り注ぎ、それでも硬い皮膚に火傷を負わせることもできない、なんという蒙昧さ、そこから誰も目を逸らすことはできない、
(燃えてる)

雲で覆われた天井に煙が棚引き雲の代わりに、そこにできる何人もの影、これだけ恐ろしいことは今までになかったし、これからもあるとは思われないのだが、肢体は湖底に捨て去られてあるわけだし、今ではわたしはそのうちの一つ、けれどもどれがそれなのかは全く見当がつかない、ああ、濡れそぼった樹々は、やがて粉塵となって庭に降り積もり、その中で混ざり合った何人もの痕跡を、あなたもわたしも、そして誰もが吸い続け、その身体の中でどこかの誰かが放棄した記憶を、反芻する、

(さらに猛って熱り立ち、雄雄しく荒荒しく鞭で打つように弓で身体を擦り、指は上下左右に忙しく、動く)

全てが燃え尽きるまで、見えるものの全てが、燃え尽きるまで、あなたは静観している、あの椅子に深く腰掛けて、その手の中にあるものは、疾うの昔に破り捨てられ粉碎されたはずの、わたしの身体の記憶、そしてあれらの叙事詩、

(耳が痛くなるようなさえずり、体中が剝られ、痛めつけられる音の名残、やがては衰え)

平面の上で燃え滓が浮遊している、漂泊する人々の記録映画のように、うつろに、その尻尾を掴むことも叶わずに、幾ら突き刺そうと

試みてももう針も残ってはいない、

(停止)

滴る音が聴こえている)

(それでもしつこく水の

モン・サン＝ミシエルの（晴れやかな）頻尿

榎本 櫻湖

木立を眺める吐息の渦巻き（ほとんど戯画である）の伸縮に目覚めた、湿地帯の悪辣な表皮をとめどなく、堆く積み上げる瞑想の頒布、悉く活動的な修道女（売女として描かれた数枚のアイコン）は排泄する、吐瀉する、輝くひかがみの羞恥

《尿の降り注ぐ午後》

舂う足首

を掴む蔦と蔓のあわいの、黄緑色の細長いもの、はつねに蠢動している、まさかその細長いなにかが修道女としての品格を掠めとる西風ではないだろうが、甚だ恐ろしく穢らわしい瞬間である

《粘液としての天使の階梯》

樹

液と目論む淫靡な指先、花崗岩の平かな腹部で濁す賑わう庭、それらを活写する神父の眩きを目撃した幾つもの筋張った胸部と折り畳まれた襞の内奥の（曰く織りこまれているのも隠蔽されているのでもなく習得することの難しい徒な無然だと）頑迷な、煩惱（？）、そう粧している

《白亜紀の鰭雲の遺留》

落雷

と諦んじる夕べの安堵とさざなみの残響、を聞き逃してさながら貝殻の内側で燃えたつ極光めいた体液

《球形の呪詛と数珠状の簾》

砂

上で囀る浮浪者の網膜へ、そのうち摘まみあげられたり乳鉢で乳棒に突かれる宿命だと記されてある、と述べる、述べたてる

《鯨の腐

敗臭を担保する》

残尿と宿便の脱構築を終えて、華やかな信徒への洗礼を再度施す大天使ミカエルは脱肛しているのだろうか（鼠蹊部での由々しき突出は、それが安息日にのみ作用することの証左である）、断続する水没した落葉樹林への並列された線分を辿る、捕虜の過度な粗暴

《訪いは拙い跛行を装って》

も

しも蠕動する腹腔内の風紋を描写する修道女の姿態を安堵とともに目撃することができたなら……（耽溺への螺旋型の破線を繕う）漏斗を胸に抱いて

《歪な泡沫を虐げる養父母の

模写》

なぜ剥奪されられないのかと首を傾げながら詰め寄ることをやめない愚かな盲いた狼よ、呼びかけの狂おしい失速を知覚し、海面での指南を反故にして（紙屑の化石）、抒情と官能の虚偽にうち震える未明の煌めきと、際限のない鼓膜への憧憬をひた隠すあざとさの紋章を、密かに盗みとる枝葉とその技法は、さして覚えたての平伏で喉頸を絞めつける厄介な

誘蛾灯へと移転できたのだったか

《くちなわ

をすべて花唇へとおしこめて》

付随する沈黙

への依拠（伸びる口吻の豊かな陰翳に退けられる揺籃）を翻す隻眼の裸婦像、それが浮き沈みする光景を眺め続ける浅はかな修道士たちの声（単旋律聖歌が壁に貼りつけられている）——、海獣の淫らなうつろいに妨げられて

《残照の差しこむ窓枠の角度》

島としての

輪郭を重複させて余暇の陥没に埋もれる、埋もれた、埋もれていた古風な様式の石柱に凭れては改めて墓碑銘を朗誦し、次第に回帰する振動数を可視化した祭壇（その供物）の際で縛れる膿瘍

《アフオリズムめいた石膏》

あ

るいはその隣でいくつも立ち並ぶ陰茎骨の標本と、それを砕きつつある、佇むことを諦めてしまった灰で拵えた粗末な兄弟（兄の爛れた頬を見よ）——悪夢である

《とても平坦な

航海》

燭台を手に、間歇的に唸り声をあげる他者の剥製、一言目と二言目の間に囁かれる暗号化された預言を、偶発的に聴きとることができたとしても、内実はいつまでも明かされないまま、たしかに喘ぎ声として俄に刺す

情報の鋭利な犬歯は横たわつてはいるが

《演

釋的に帰依し》

分光された雷鳴の不可逆な関係性を解く、会釈しながら、排斥しながら、探求される明晰ではない汽水域の鉦脈を察知して、忘我する束の間の癒着に包みこまれるようにして

《交歓の詐称》

刺胞性物質の転がる雪原までに及ぶ優雅な装飾具、に手足を縛られる穏和な嬰兒の製図、ふやけているまぶた、ふやけていない映像、寄生形双生児の素描をなぞる毛髪は、霜の内部に封じこめられたひとつの弁明であつて

《喫水線に囚われた

仮想生命》

御父は猶予なく催し、岬の突端から跳ねあがる越境の残留を迸らせ、撓る数本の肘に抗う発達の邂逅を得る、御父は波濤を模倣し、危ぶむ舳先へ鯨油を注ぐ指先をへし折り、臥せる憎悪に跨がった混乱を象る、御父は遍く流動に任せ、豊満な三角州の沃野を睥睨し、逆巻く鞭毛を苛む曙光を覚える、御父は擡げる変遷を嗜好し、錨としての複数の風下で沐浴を終え、暗澹とした秘儀を購う、御父は血脈を愛撫し、寡黙な塑像を愚弄する猜疑を齎す、御父は誹謗を抓り、奔放な逡巡を铸造した濃霧を混淆させ、断絶への至福を漲らせる、御父は燻る胡乱に顛倒し、臨界へ

の茫漠を裁ちきつて、誤謬の産湯に膝を侵し
冒される、御父は剽窃を連ね、充溢と閑散と
を繰り返す摩耗を穿ち、錯綜と炸裂との併合
を試みる、御父は憂慮を怠り、唐突な叙述を
霊廟などと縫い合わせ、蔓延る虚ろな糜爛を
聳やかす、御父は紺碧を腹這い、汚穢の写植
を掬う萌芽となつて、路傍に苔むす頃合いを
待つ、御父は疾病を焦がし、義憤に募る妄言
を滾らせ、萎びた溶接を閉塞する、つまり我
らに平安を与え給え、

《dona nobis pacem》

お返事も —— C.M.に

佐藤雄一

草木のそとでわたしの体温をたもつもの 音、庭、の角々の啼きごえに声も吹くね
(電気も) ふうせんだらけの声でながれるところ ながれるところ はずんだ電
子ふくらみ跡をのこしてながれてくれるから わたしとよべるかもしれない確率を
(電気も) あなたの体温をたもつおとにしてゆける

言葉からみれば 鼓動のことり群れた庭々 譜からみれば 草木のうつくしいみ
だれにみえるよう はなればなれに そしてまだ帰り途なんだ ここからみればね
北から東までの3つの角度が小躍り あとはだめ そしてまだ帰り途 ことりとこ
ろの(この声も)

安定を常に置く

間 文子

いきいきシトロエン海と怖い連体形事情が骨を伝えにやって狂った
平和を売りに来ましてってブラウニー？
福音と叙文が旗を織りしも関係が無いお寺の台所にですね
あるのではなくって 場外に求められて異境 小麦粉の皮を引っ付ける作業だ

繰り返せばよいのねああそうだ 誇りは恥者を包み込む為だけにある
退屈だ 信念だ もう走れない 来て これで十分だ十分なんだ何も望まない
世界では戦争が起きていてたくさんの人が血を流しているらしい 隣人が血を見る時代なのだ
若さより来りて瞬間の奢りが短絡的な陸上部を生み出すのだ 一体何を望むのでしょうか
あたくし本気で考えておりますのよ

心踊る思い付きを 23 つ詠えた詩を昼食後に焼き捨てて真実に帰るの
それくらい真つ当な生活を求めているの
鼻孔に鱈の小骨をしゃぶって突っ込むといいよ
白髪みたいだわ
呼び求めるのは晴れですが
裏金曜日はその白髪の大群がくしゃみを放ちニューヨオクを襲撃するのよ
僕の行動は三百連もしない内に赤信号を歩き回る児童を歩き渡らせる事になるのでしょうか
炒り卵が食べたいなあと口を噛んだ湘南 あい
つまりだ 笑ってた 車が止まった 停止する時代だった

k o m i n k a n i k a i

古川家

二階

力 二 エ ・ ナ ハ
k a n i e n a h a

酔

木

暗い境界。呼び名が母語に象られ。
kuraiyoukai yobinagabogonikatadorare
雷鳴。紙、崩折れて。祈る子の宮。
raimei kami kuzuorete inorukonomiya
忌声、染む闇。ナズナ、うな垂れ。
imigoe shimuyami nazuna unadare
酔夢、えいじつの。死孕む、幼生。
suimu ejitsuno shiharamu yousei
儕の亡骸。沈丁花。月、道づれて。
tomogaranonakigara jinchogetsuki michizurete
血の根、春泥。未だ無い脚、捜し。
chinone shundeimadanaiashi sagashi
八千、底割れても。迎えにくよ。
yachi sokowaretemo mukaenikuyo
アセビ、世を遊び。馬足の見る夢。
asebi yowosusabibasokunomiryume
散り散り。肉の破片が突き刺さり。
chirijiri nikunohahengatsukisasari

Suiboku

(AM8:51 / Feb.25 / 2011)

(PM10:41 / Feb.17 / 2011)

taruho meimetsu tetsutounosandouatochini uzumorete
足穂、明滅。鉄塔の参道跡地に、埋もれて。
imagoromumeinoakariniterasare anatahatabito
今ごろ無銘の灯に照らされ。あなたは旅途。
paperwhite kagaminouranotaninooto mede
ペーパーホワイト。鏡の裏の谷の音、愛で。
ikutsukuyo menonakanoinorimoe tsumugaretausui
幾月夜。目の中の祈り萌え。紡がれた雨水。

紙 shihakku 白

kamikakushi kami sakanadete toritsukare kozuenikashimai
紙隠し。髪、逆なでて。禽憑かれ。梢に菓子舞い。
gushousurusangatsu saekaeri kominkanikai kotatsunishippo
具象する三月。冴返り。古民家二階、火燧に尻尾。
lantern suzuran hitonokage seibotokotorinomeninamida
ランタン、鈴蘭、ひとの影。聖母と小鳥の目に涙。
y u k i w a r i

割 雪

zanzou kakurenboyokochou kuhkinonekoto tama amata
残像。かくれんぼ横丁、九匹の猫と。魄、あまた。
garekinosokonoyukiwariichige hikaritodeaimasuyouni
瓦礫の底のユキワリイチゲ。光と出会います様に。

(AM10:56 / Mar.3 / 2011)

マデイ・ウォーター

金子鉄夫

不意に動けなくなつて、はらわた掠めとるコードがひびき、すれ違う鼻の穴のない人に「おまえたちも切れよ」と錆びたスキ鋏を渡される新宿の夕闇。ポン酢臭い白紙が舞い落ちて、肺魚の姿勢のまま歪んでいる俺たちマデイ・ウォーター。買う、買わないの話じゃなくて盗む、盗まないの話でもない。ダデイ、恥ずかしい患部が痒くなるたび、毛穴から無数の不吉なしゃがれたポイスがするのだが、それは俺たちがこの街に二の腕から沿っていないからか？誤読してしまったビルディングから千鳥足で出てくる電柱たちは、どこかしらに、まぶしい、まぶしい木目を持つていて、動脈で捲れない本日のページにケツをまくる俺たちマデイ・ウォーター。寂しがり屋つてわけじゃない、頸から粉末になつてゆく、この街の感嘆符に恐怖してデブつてデブつてゆくだけさ。このまま生きぬいてしまふつもりだけど俺たちは（わりいねっ）脳髓のネジを抜いて浮き足立てば射止められる惑星だつてあるかもしれないだろう。マデイ・ウォーター、俺たちマデイ・ウォーター。ダデイ、偶然じゃないのさ、いつかは出会つてしまふフラクタル。このまま生きぬくつもりさ（わりいねっ）全身にコーヒール（ブラックで）浴びて、一億本のマイルドセブンを吹かし痒い痒い恥ずかしい患部を晒してあるく新宿の夕闇。「おまえたちも切れよ」とすれ違う鼻の穴のない人に錆びたスキ鋏を渡されて、手にしたスキ鋏で何を切ろうか？新宿。振れた血液に腫れた戦線のあとで俺たち、俺たちマデイ・ウォーター。切るものなどどこにある

猫殺し

金子鉄夫

袋へ入れたまま腐ってしまった
しこたま打ちつけた深夜
忘れてしまっていた
そんなことを思い返して
くるいそうくるいそう、と
うちで爪を噛んでいる猫を
呼吸をみだしながら俺は
また殺そうとしている

響くものなんてなにもない
喋りすぎてしまった
この痒い穴に足首を
掴まれてから何度も
違う、といわれて
そのたび古い箱へ詰められて
やわらかい汗をぬぐっては
いけすかないカタカナの口臭で
ジミヘンの真似をしたりした

踝が溶けてしまっていた頃に戻りたい
なんておもってしまう

俺の身体には
まだスヌーピーの骨を煮た
甘い匂いがこびりついていて
形相のわるい塊を背負っては

(海なんて浮かべずに
(海なんて浮かべずに
落ちてゆく

赤い電波を引いた

その向こう側の咲き乱れた陣地では

生臭い暗号を散らした童話が

断絶を求めている

それが

それが悲しくさせるのに

俺のタマシいは

ちゃんとハマっていて

あざやかな火を食べて

食べている

滑ってしまう国語なんていらな

糞つたれ!

あらゆる発信が荒らしてゆく

この痒い穴の深い場所で

深海魚の無意味さで

ゴシゴシ、ゴシゴシと

緑色の赤ん坊たちが錆びた包丁をくわえて

般若心経に合わせて

ダンス・レッスンしている

濁るのはやめにしないか

にぎやかにまきちらそう

この身を酸味の効き過ぎたこの身を

この穴へ痒い穴へ

それでも

それでも俺は吐きそうな草の味が

口の中でひろがつて

呼吸をみだしては

また殺そうとしている

くるいそうくるいそうと

うちで爪を噛んでいる猫を

「くそつたれ」知りませんか？

金子鉄夫

僕の「くそつたれ」知りませんか？多分、ブツブツ肌を搔いで、舌を噛んで笑って笑っていると思います。知りませんか？知りませんか？嘘くさい茎をたぐりよせ、恥骨からひるがえつて、利き足だけで立っている、注射器と九十年代の古い週刊誌ばかり散らばっている海辺。べとべとする砂に埋もれているパイプ椅子には、「くそつたれ」が座っていたのだろうか？7、88・9372・デタラメに数字を並べて、波打ち際で尾鰭をバタつかせている鮫鰾の真似をして呼んでみる。所持していないが所持しているふりをしてズレた言語で喋ってみる「おいしく食べていない」「僕はおいしく食べてなんかいない」あらゆる廃油に濁った浅瀬の方ではゴムのように、知っている、はず、だが他人の装いで交わっている男と女。「なに？」「なに、なに？」「なに言ってるの？」びーん、びーんと、びーん、びーんと、冷たい音が走って、地平線で目を瞑ってお経を唱えている大きな大きな顔した老婆。この何気ない風景の裏側で「くそつたれ」が笑って笑って刃物を研いでいたりするのだろうか？僕あ知らない、39、1・80・672・僕あ知らない知らない。知・・・らない。「くそつたれ」「くそつたれ」背後で小さくなった眼球を必死に海水で磨いている血縁のようなビーチ・パラソル。僕は「くそつたれ」を探しているんです。硬くなったまま逃げてしまった「くそつたれ」を「くそつたれ」を・知りませんか？「くそつたれ」知りませんか？

川の底からこんばんは

疋田 龍乃介

よるのうちいきえていくつるうまき
つるうまきのさきにあるきまがさき
するとさまがさきつておよげませんよ
のりのはえたきまがさきのごりようは
おのりかえくさいごひいきに

川底がふんぞりかえつてなじゆね
ごじゆねみゆみゆじゆねのかねのねが
じゆじゆんごじゆじゆじゆん

かがみをながれてくるかつぼーる
くりかえされるぼるぼるよ

すれちがうとにごりじょうではんらん
いごころようにこのかおはにらむけれど
なぐられてばかりでははぐれてしまふ
ついでなさついでこいしをつらぬく
みなもにはむすうのひとみひとみ

ふとみるとよるとみろつて

ぼるぼるぼるぼるぼる

ぼるぼるぼるぼる

ぼるぼるほら

川の底からこんばんは

いくつになつてもほしがきらい

かわからかわをのぞくとはまるで

きまがさきのはしつこでえまがもえる

きやんどるにつきささるしぶきのつきが

あたらしいほしを川の底にしませる

さかなたちがいつせいにせいせい

うずまいているいすのなかでまわっている

かんぼくをのりこえようとひつしに

がぬおとうなぎのいびきごえ

さかのぼるほどこわがつていつても

もうすぐよがあけますよ

淡水の匂いのしないところへ

疋田 龍乃介

お化け屋敷には私は冬乳母に醸されるように許してもらわなければならなかった。藻や、鰻が、ところ狭く浮かんでいてラジオからは止まりかけの独楽の回転音だけが響くので何をするにも許可がいった。粒だった眼病、これは、これまでに患った眼の疾患は両手指で足りるほどだが、そうやって限られた粒とともに滴っていくアルミ缶を外側からうるうる乱雑に転がしながらお化けと向かい合うことだけがとても不思議に思えてくるとすぐに見上げるようにして鰻を追いかけて周りが見えなくなる。蟹の動く胸板の上で過ごしたいと思うこともあった。実は鼻も貫かれているのだった。

師走は、探し物も独楽の音が遠ざかるとやわらいだ屋敷の中でばかり動き始めるものだった。探すことは、お化けによってさらわれていくことが伝えてくれるような気がしたから私がそれを繰り返しても飽きることはなかった。川の中で魚たちが覗き込んでいる変な大国の窓辺から活発に温かくなつていくようにして莫大なBGMが屋内を包み、浮かび、上がった背びれを片っ端から堤防に咲き乱れる紫陽花に滑りこませていく趣向は続きが始まる頃になるといつもゲームオーバーを迎えてしまうのだから、楽しい日はお化けなんてきつさと忘れて淡水の近くを歩いてばかりいる。

十四日目の夜に二対のお化けが死んでしまったことでピンチが発覚してしまう。お化けの中の人のまた中にいる魚あたりまではいつも気付くことができるのもう一步手前の死んだ姿が私にはどうしても見抜けない。これはピンチだった。嗅がないでいるよりかんちこちん、と捨てたはずの香辛料の味覚が舌の上に蘇って糸を引いてざらざらつき始めてしまっているのにはしかし今もこうし

て明らかに羊の顔をした鰻のことばかり考えている。なんで淡水魚はあんなにも滲みるのだろう。滲みごしることが寒を戒めることだとは思えなかつたし、ピンチをやり過ぎることで、遡っていくことになる滝、颯爽と私の咽喉もとのフィルターから埃を巻き散らかすことを知っていたし、

淡水はどうして逸れてばかりいくのだろう。春も、鰻を追いながら眺め見る橋立の上空に死んだお化けのどちらかがどちらかに似た患部のカテーテルを川に繋げて、浮かばれているのだ、って、それは慎まないといけなかつた気がするからそこらの石を投げつけることだけが飛び出していく手段だと思っていたのだった。じょおりや。川沿いのことを思い出すと寒い日だったが冬乳母の告別、淑やかに閉ざされている。それでも結えるだとか吸うだとか。潜ってばかりして沢のつんぎく淡水の香りの夥しい場所へ目をつむりながら、これは渡された報告書で、すべからず砂の上、妙に暗い欠片の丁寧な煽りを続けている。

失題、即ち闘争マシーン漂流記（抄・二）

金山 大地

25:10 (私小説——a work)。

25:12 盲目の少年仏徒を殺した。

25:28 フライパンで殴り殺した。

25:40 どこかで見たような裸電球。

25:44 幽かに揺れているようだ。

26:04 葬列が舞踏か。

26:09 詩人。

26:21 奴はミソ・スープを飲んで。

26:23 詩人はミソ・スープを飲んで。

24:23 (嫌な季節——a work)。

24:41 眉の上にビニール・ロープ。

24:43 部屋の隅で資本を投棄。

24:51 無惨な雨。

24:52 押しなべてビタミン剤。

24:59 所詮間違いだらけの世界か。

25:11 冷蔵庫には危うい手紙がある。

25:15 深夜の血。

25:42 死には翼の影がある。

23:56 (罪と罰——a work)。

23:59 美しい噂話のために。

24:10 唇を隠す。

24:24 胸が痛いので凶々しい夜食を吊るし上げる。

24:27 暗闇から青梗菜が攻撃してくるので眠い。

24:39 ダルな指を断ち切る。

24:40 新たなる失禁のために。

16:11 (内乱の予感——a work)。

16:17 人非人はメモ魔であるだろうか。

16:20 人非人はメモ魔であるだろう。

16:33 暗転。

16:37 やはり情事しかない。

16:39 夢の島など実際ひと跨ぎだ。

16:40 現金などもひと跨ぎだ。

20:42 21世紀の風雲に関するチューイン・ガム。

20:46 人非人の文字は崩れ続ける。

20:48 それが歴史。

20:52 それが暴動。

21:32 恋人たちは蚯蚓のように空を飛んだ。

23:18 (栄光と悲惨——a work)。

23:25 だぶだぶの肉だが誰の肉だか判らない。

23:52 マジック・ランタン・サイクルなんて全然面白くなかった。

23:54 最早どうにも。

24:17 宙吊りの馬鹿が。

24:18 宙吊りの馬鹿を。

24:26 名もなく窓もない部屋で。

24:38 ならば首だけでも閣下なのか。

24:51 首だけでも閣下は閣下なのか。

22:35 (憎しみ——a work)。

22:43 あう。

23:12 夜ならば夜であれかし夜は夜。

23:13 夜な夜な夜は夜のまにまに。

23:29 あう。

23:41 あう。

00:06 党派、

00:34 念力、

グラフィック。

01:18 なべて言の葉の軽重は、

20:54 美しい猿の美しい愁眉によって計られ、

21:12 水を恐れるなんてまるで狂犬病のようで。

21:55 意識、

メ縄、

エージェント。

22:07

22:20 新しい人間の誕生を見る地政学的子供も、

新しい人間の誕生を見ない地政学的子供も含めて、

大らかな戦争(を)を語らえば。

22:43 勃起、

暗闇、

23:03 シンフォニー。

24:12 覗き穴、
に捧げられた、
24:14 虹色の不可逆。

24:20 蠅の翅が記憶を問う、
のだが

24:24
息苦しくて、
24:37 物語ることがならぬ。

24:40 たまには映像を拒否して、
青い黒、
とか、
黒い赤、
とか、

25:22 皮膚呼吸しなければ、
と思うがしかし、
25:29 言葉になりたい皮膚、
のようなもの、
25:36 のために刺青、
するばかり、
であった。

26:02 近眼を労り、
ビニールの(死の)耳を言挙げる、
覗き穴。

26:11 (笑)。

(次号へ続く)

私の名前をいっぱい言います

兼柊綾

世界中のジッパ―を

わたしが降ろす

世界中のジッパ―から

はみだす線／裂け出る面・白い頬

(由来)

「兼柊綾の綾は 曾野綾子さんに由来しています

また 兼柊綾の綾は 三浦綾子さんの綾です」

兼柊綾の綾は

お父さんとお母さんとおばあちゃんが

そういうふう

世界中のジッパ―を

私が見えないよう縫いつけとく

毎日「恥知らずどもめ！」って

叫ばれ続けている

白い頬黄色い頬

隠喩

ここをこれで区切る

あ、揺れている

襟元の刺繍の縫いとりを思い出している

兼柊綾の綾は斜めに交差します

兼柊綾の綾はねじ曲がつて消える

女性でもこの世の中で活躍できるようにって

そんなふう

に名付けられました

(喘息の薬の副作用で時々手が震えている)

綾の部分にだけ 二重線をひく

「兼榊 綾」

親族の 誰にも迷惑をかけず

めずらしい名字なので ネ

綾は 死に絶えて

わたしだけ 追悼する

馬鹿馬鹿しいネー

って

はみだす線／裂け出る面／揺らぐ弦と弧

の向こうから

たちあらわれる のを

待っている

何

私の名前をいっぱい言います

それでここを区切る

それで裂をふさぐ

暗喩暗喩隠喩をかきわけ

ふさいだはじから縫いつけて

湧きでるやつを飲みほして

それでここを区切る

兼榊綾の綾で区切る

(瞼の奥) 踊っている女の人

兼樹綾

ドレープ 頭皮 皮膚の続き

剥がす 食べる わたしたちは

これだけ遠ざかった

すさまじいねタンクから

縮んだ 膨れた

噴き出してくるよ虹彩!

カシオペア座

交通路には

神経を焼き切る 熱量

条件Ⅰ・粘り強くわたしたちは異端を秘め続ける

条件Ⅱ・遠ざかれば遠ざかるほど生活を遂行する

灰色は全部燃えろ

ドレープ 髪の毛 踊る人の

拍手しか しないわたしたちは

条件Ⅲ・ただしこの場所では安心できない

まばたきする時に、

私の瞼には女の人が

踊って 皮膚を 剥がして

火花を 散らして 燃えて いるのを

わたしは黙っている、わかんないね

球根 爪先 眼球 皮膚

執着 先導 肛門 溶解

交換 駆逐 乗車 星屑:

壁について

萩野 亮

煮凝りのようにつめたたく張りつめた夜を、平たい建物の窓から家具や調度が落下している。奥行きをひと時も感じさせないその扁平さからはひとの気配が無く、絶望したオートマトンみたいに椅子や筆筒が落下しては、鈍くはげしい破傷音をあたりに散らかす。生気をいちじるしく欠きながらなお黒目だけはてらたらと充実させた若くないその女は、二三の呪詛のことばとともに、そのわずかな奥行きを露地の一夜にうち棄ててゆく。

やがて壁だけが、遺された。かの女たちの暮らしの線をたしからしく担っていたはずの、山羊の腸のように汚れた壁が。

調度や家具を、窓や扉を気に留めるあまり、ひとはたやすく壁を忘却してしまう。レコードプレーヤーも、あらゆるドアもまた、ひとの暮らしを内にする壁ではないのか。等しく蒼ざめた集合住宅で、際限なく発光をくりかえすテレビジョンの受像機は、いまや都市を攻囲する壁になり果てている。

文字の書けないその青年は、慣れないペン先で机上を玩ぶのをやめて、やがてごつごつした友の指を借りて、遠く遠く妻への手紙をつづり始める。孤島の色彩、レコードから、あの日の革命歌がきこえる。

いまはもうない、棄てられ否定され尽したその町の涯で、少女はうつろに足を折り、男はそのひぎに頭を凭せながら、染みや汚れにまみれた壁に、一億のざわめきをきいた。窓から遅く遅く透過する光の細線は、薄やみの壁一面に蠢動するフィギュアを平たさのうちに躍らせる。そのすがたは、消えてゆく町の残響のなかで、足を折り、からだを横たえることしかできないその日の少女と男に、あまりに似ていた。

*右の文は、ペドロ・コスタ監督による映画『コロッサル・ユース』Juventude Em Marcha (二〇〇六年)をもとにし、またそのフィルムに向けられている。

編集後記

金子 鉄夫

この後記を書いている最中でさえ、絶え間ない揺れを感じている。現在、午後十時二十二分。流れっぱなしのテレビの横で、いったい何が書けるだろうか？

昼間の激しい揺れから一步も外へ出ず、ずっとテレビの前で非現実、しかし実際に起こっている、括弧入れし続けてきた災害を目の当たりにして、何を考えればいいのだろうか？ キーボードを叩こうとするユビは、いつだって芯を得ずに、頭のなかは錯綜している。

今、詩書きの端くれとして何が：否、絶対に何も書けないのは自分でよくわかってる。どんな言葉を紡いでも、結局、キレイ事だ。僕は漠然と、東京、西荻という揺れはしたが際立った災いもない町にいて、絶え間なく速報が入るテレビを前にして戸惑っている。充分な設備も整っていない冷たい体育館で、泣き喚いでいる幼児をあやしている母親だって泣きそうだ。戸惑うだけの僕は無力だ。だが、無力を受け入れて、その次に考え行動に、そういつだって救いの行動だ、僕の書く詩なんて何もできやしない、出来るとしたら、この「骨おりダンスっ」第二号を公開することだ、と思った。こんな悲惨な状況のなか、何が詩だ、と賛否は両論であるとおもうが、申し訳ないが、僕に出来ることは、せめてメッセージを送ること。公開したところで何がどうなるかわからないが、これも月並みな言い方かもしれないが、しないよりマシだろう。

奇しくもゼロ年代が終わりを告げ、十年代に突入した直後に、こんな有様だ。もう、避難できる場所など、どこにもないのかもしれない。世界に目を向ければ、フランスがリビアに空爆を打診したという。頭じゃなく膚で感じる。のっぴきならないウワバミが大きな口をあけた十年代が始まったんだ。9・11でゼロ年代が始まったように。のっぴきならない。のっぴきならない。

ゼロ年代をフラフラと過ごした僕は、今度こそ、十年代に詩に何ができるか、根源的な問いに骨おりメンバー共々、挑みたい。

今回、寄稿をしてくださった方々、本当に感謝いたします。後、骨おりメンバーにも。

公開をすることに関して葛藤もありましたが、公開させて頂きました。被災地の方々の、ご無事を心から祈ります。

詩誌 骨おりダンスっ

編集後記

萩野 亮

死ぬのはいつも他人、とデュシャンはいつた。
ぐわんぐわん、と空間ごと攪拌するような横のゆれを感じたとき、大阪九条の町なかにある半地下の劇場では、インドの青春映画がまにあわせのハッピー・エンディングを迎えようとしていた。

災害報道を前にする、この居心地のわるさは何なのか。映画祭取材のため滞在中だった実家のテレビを夜、点けて茫然とする。ふだん暮らす東京の混乱が、PCやケータイの画面からも伝えられる。何重もの遅れ、を感じる。死ぬのはおまえではない、とそれらは告げているのか。
ものを書くことは、なお遅れることだと思う。なおずれていくことだと思う。書くことの遅れを引き受けることは、死ぬのがいつも他人である事実を、引き受けることでもある。

詩誌 骨おりダンスっ

編集後記

吉田 恭大

今回予定していた金子吉田コラボ企画は事情により延期となりました。また来月お読みいただければ幸いです。

コラボに限らず、今後とも短詩型としても何らかの活動ができればとおもいます。

何も書くことが無い。
いま、我々が被災者の方々のために出来ることは、節電を心がけることが一番だ。

この原稿も、バッテリー駆動のパソコンで書いている。
バッテリーはあと一時間持つ。それまで、あがいて書けないまま書いてみようと思う。

今日は3月12日だが、元々は詩論を書く予定だった。しかし、災害によって突きつけられた「詩に何ができるのか」という問いを何度も考えては筆が止まり、書けなくなってしまった。正直に告白してしまえば私はこれまで「詩に何ができるのか」という問いに対して冷笑的だった。詩に何も出来ないのは明白なのだから、書くこと／読むことの悦楽のためだけに書けばいいと、そう思っていた。だがどうやら心は平静でいられないらしい。東北の方々の比ではないと思うが、自分も実際に震度5〜6の揺れの中「死ぬかもしれない」と感じ、また今も放射線の危険性について戦々恐々としている中、骨ダンを公開することについての意味を、考えざるをえない。詩業界における成功とか、知名度とか、そんなものは置いた上で、自分がなぜこれを発表するのか。日常ツイートさえも皆が遠慮している中、これをツイッター上に流すことにどれほどの価値があるのか。12日・13日に行われるはずだった様々な催しが続々と中止されていつている。そんな中何かをやり続けようとする団体に対する非難の声も多い。

直接的に詩に出来ることなんて何もないんだ。

詩の愛好者の心の癒しにもなりやしない。

大切な充電を詩誌を見るために使うわけがないだろう。

被災情報が流れている中、全く関係のない情報を流すな。

本当に正直に言って、骨ダン公開に対して自分でもこのような思いでいる。

同時に、インテルの長友が喪章を付けてプレーしていることが人に感動を与えていることも確かだ。だが、我々は著名人ではない。千羽鶴でさえ、祈りを込めた千羽鶴でさえ、現地の被災者の迷惑になる（置く場所がない）こともある。

そんな中、詩が、どうして、何が出来ようか。

その原稿が骨ダン2号に載っているかは今の段階では定かではないが、いずれにせよ、そこで何を書こうとしていたか、ここでざっと（本当に簡単に）書きたいと思う。それは、デリダが「署名、出来事、コンテキスト」の中で書いている言語における反復可能性についての話から始まっている。そこから、詩における言語は反復可能性の呈示が大きな特色となっており、コンテキストの接ぎ木の場合として詩空間はあり、ここではオリジナルな志向が宙吊りにされている旨を述べようとしている。また、そのような性質はパフォーマンス・アートと類似している。パフォーマンス・アートにおいても、身振りは常に異なるコンテキストに開かれているのだ。例えば、マリーナ・アブラモヴィッチの自傷パフォーマンスを考えてみると、自傷の身振りはそれ自体として他の全ての事象と同定可能であるが、アブラモヴィッチが観客の前で行うその身振りは、その反復可能性故にアブラモヴィッチのそれとして同定できるのである。詩でもパフォーマンスでも、それぞれを構成する素材（言葉・身振り）が絶えず異なるコンテキストへと開かれていつつ、なおかつ認識を迫ってくる。それでは、詩とパフォーマンスとの差異を構成するものは何か？私は本質的な差異はないと思う。言語的／非言語的、身体の現前／身体の不在、時空間の共有の有無などの差異はあれど、それは部分的なものだ。端的に言えば、絶えざる意味付けとそれを逃れる経験のせめぎ合いという点で、両者の根本は同じなのだ。他の分野のアートにおいても事情は似たり寄ったりだと思われるかもしれないが、この二つは他コンテキストへの開かれと、意味／意味の不在の経験を強く突きつけてくる点で、特異と言えるのではないか。それを経験するとはどういうことか。オースティンの言語行為論は、先にも挙げたデリダの「署名、出来事、コンテキスト」で批判に晒された。そこで問題になったのは、なんらかの行為遂行的パフォーマンスな発言の、オリジナルなコンテキスト・発話者とそのテキストの発話者であるという真実性が、言語一般の反復可能性から鑑みて危ぶまれるものであるということであった。パフォーマンスとは「行為遂行的」というだけあって、状況を変える発話である。その発話者の真実性が失われた時、しかし受容者の問題が棄却されるわけではない。無限に反復可能な発話者の意志から離れて解釈される、常に他なるコンテキストへと接続可能なものを、どう自分のものとして意味付けするかという問題は依然として残るわけである。このようなことをパフォーマンスとしての詩は引きうけて来たのであるし、そういった観点から詩を読み解く必要もあるのではないか。そのよう

なことをその原稿では書くつもりであった。

いま、ツイッターで流れる情報に対して、それが正しいのかどうか、ソースが確認できるのかどうか最重要視されている。つまり、正しい／正しくないのコンテキストだけが支配的なのだ。もちろんそれを否定するつもりはない。被災者の為に正しい情報を流すべきだろう。だが、本来言葉は、身振りは、人間は、一つのコンテキストにのみ生きるものではない。それも、客観的に正しいコンテキストのみに生きるわけではない。世界はあなたのコンテキストに接ぎ木される。そこであなたがどう意味付けするか、どう解釈するか、どういったコンテキストに生きるかは、あなたが決めなければならない。そしてその判断は常に不安定なものだ。誰も確証は与えてくれない。自分が自分で、自分の見方に対して肯定しなければいけない。

少し乱雑な言い方を許して頂けるならばこういうことだ。

詩はわからないと人は言う。

たしかに、山本陽子の詩を見ても、意味がわからない。

少し引いてみよう。この文章はネットから引いてきたので、興味のある方は一読してもらいたい。「遙かする、するするながら」という詩。

純みめ、くるつく／くるつく／くるつくばちり、とおとおみひらきとおり むく
／ふくらみとおりながら、

わおみひらきとおり、くらっ／らっく／らっく／くらっく とおり、かいてん／
りらっく／りらっく／りらっく

ゆくゆく、とおりながら、あきすみの、ゆっ／ゆっ／ゆっ／ゆっ／ とおり、微っ、

凝っ／まっ／

じろ きき すき／きえ／あおあおすきとおみ とおり／しじゅんとおとおひ
らり／むじゅうしむすろしか

つしすいし、まわりたち 芯がく すき／つむりうち／とおり／むしゅう かぎ
たのしみとおりながら ※1

詩に慣れ親しんでいない読者には、本当に意味がわからないと想像される。

しかし、おぼろげであれ、音的な情報や既知の文字（「純」「微」など）から、

*1 <http://blog.goo.ne.jp/bunyahagi/e/9e7037fc5f741fb2e1fea38e1e028b3>

2011/03/12 参照

微かに何かを感じられていくだろう。その、全体としては茫漠としてしか感じられない知覚経験を、どのようにして自分なりに認識していくか。どのように意味付けしていくかが、詩というものが可能にする経験に他ならない。

あなたは被災を、世界の状況に対して、それがどんなに意味のわからない、非現実的な、想像を絶するものであれ、認識し受け止めなければならぬ。というより、我々は情報を得るとそれを認識しようとしてしまう。「意味のわからない」ことが起きたときに、パニックにならず、それが明確な意味・処理に結びつかなくとも、「意味のわからない」状況を否定しないこと。どの言葉が正しくて、どの言葉が正しくないのか、それがわからないとき、それでも取捨選択をして、自分なりに解釈して対応していくこと。そういつた「意味」「解釈」「情報」が分けのわからないことになっている事態に対する、レッスンとして詩の「意味のわからなさ」があることができた。

それから、テキストを、詩を読むということは、「私はここにいない」ということを確認することだ。圧倒的な惨事の中で、読む余裕のある人はいないだろう。それは当然だ。しかし、被災地にいない人であっても、PTSDや鬱などになることはある。かくいう私も東京にいながら、何とも言われぬ感情に襲われている。そんな人たちがいたら（確実にいるだろう）、こう伝えたい。

「あなたは被災地にいない。あなたはそこにいる。それでも、あなたは被災地の情報を、映像を、画像を、それを伝える言葉を見て、あなたの身体全身でそれを引き受けている。あなたは、想像的なのであっても、被災地にいる。だから、その場にはいないからと言って、何も出来ることがないからと言って、どうか苦しまないでほしい。あなたが被災を感じ、経験し、それを受け止め、行動していること（日常通りに生活することも行動だ）を誇りに思っしてほしい。それが人間の出来る祈りだ。」

もし、被災者の中で余裕のある方が、骨ダンを見てくれるようなことがあったなら、逆に、一時であれ、他のコンテキストへ、他の場所への想像的な避難となることを祈っている。我々人間存在自体が、常に、他のコンテキストへと接ぎ木されうるのだから。アウシュヴィッツの悲劇ですら、『アウシュヴィッツの残りのもの』というアガンベンの偉大な著作を生んだ。世界の全ての営為は、オリジナルとは異なるコンテキストに開かれ、常に意味付けをされ続けている。

そうした中、一つの決定的な盲信をせず、絶えず異なるコンテキストへと開かれてあることが、言語の・意味の・解釈の存在である人間として本質的なことなのだろう。東北大震災が、東北大震災の被災者の方々が、一刻も早く震災とは異なるコンテキストに開かれることを祈りつつ、我々もテキストを複数のコンテキストへと開こうと思う。我々は種を蒔く。

詩誌 骨おりダンスっ vol.02

編集長：生熊源一

編集委員：金子鉄夫 + 萩野亮 + 吉田恭大

発行日：2011年3月13日

デザイン：三澤水希

連絡先：ikumagenichi@gmail.com (生熊源一)